

## 「5年間を振り返って」

子どもの権利調査員 羽原 牧子

(在籍期間：H22.4～H27.3)

子どもアシストセンターの調査員の仕事に就いてから早いもので5年が経ちました。

子どもたち、保護者の方たち、学校の先生たちとのたくさんの出会いがありました。振り返ると様々な思いが湧きあがってきます。

救済申立てや相談者からの要望があった時に、当事者双方の間に入って問題の解決や改善のために調査調整をするのが調査員の仕事です。初めのうちはどのように進めればよいのか手さぐり状態でした。

ある出来事が起こった場合、見る人の立場によって目に映る風景は異なります。また「子どもにとって一番良い方へ」という願いは一致しても、何を良しとするのかはその人その人の人生観、価値観が関わってきますから、必ずしも同じではありません。その間に立って子どもに役立つ調整ができたかどうか。何よりも子ども自身が「自分もちゃんと考えた。勇気をだして自分の気持ちを伝えた。だから大人たちが真剣になってくれて、よい方に変わった。」とってくれたかどうか。一応調整を終了しても「これでよかったのかな？」と思うことが、しばしばありました。

相談員さんたちと違って、調査員が関わる子どもたちの数はそう多くはありません。調整活動に入っても子ども本人には会えなかったこともあり、そんな時はすごく心残りでした。お付き合いする期間もそう長くないので、その後の様子はわからないことが大半です。まれにはその後の様子を知って、その成長ぶりに目をみはり、うれしく思ったりすることもありましたが、ほとんどの場合、「どうしているかなあ」と思い出すことしかできません。

でもアシストで仕事をしていて改めて感じたのは、大人にはない、子どもの可能性、可塑性です。ですから、あの彼も、あの彼女も、新たな課題にぶつかりながらも、きっとたくましく日々頑張っているだろうと思っています。

うれしいのは「知り合いの人からアシストセンターなら頼りになるから相談してみたら、と言われたので」と言っている方が出てきたこと。幅広く相談を受ける体制と、救済申立てや調査調整活動ができる仕組みを持っているアシストセンターが、子どもたちのためにもっともっと活用されなければ本当にもったいないことです。

でもその一方で、世の中には、どこにも相談できず一人つらい思いをしている子どもたちもたくさんいることでしょう。そういう子どもたちに気づき、声をかけ、見守るのは、どこにでもいるごく普通の大人たち誰もがしなければならぬこと。これからは私もそんな大人たちの一人になります。

「しっかりやってよ！」と鼓舞してくれる存在だった子どもたち、協力し支えてくれた方たち、ありがとうございました。さようなら、アシストセンター。

## 「相談者の力を感じて」

子どもの権利相談員 関崎 弘美

(在籍期間：H24.4～H27.3)

相談すること自体が凄く勇気が必要なことだと私は思います。自分の身に起きている事を何とかしたい…何とか解決したいと考えて相談してくれるんだと…

自分の考えていることや自分の困り感を頭の中でまとめて話してくれる人…何をどう話せばいいのか分からなくなっている人…誰かに自分を分かってもらいたい思いでいっぱいになっている人…本当に話を聞いてくれるのか探りながら試しながら話し始める人…それぞれの言葉で表現されていくそれぞれの思いを聴かせてもらいました。

相談者の多くが自分で何とかしたいと思っていて、そのために何をどうすればいいのかを探っていることが多いと思います。相談の中で一緒に悩み、一緒に考えて相談者にできることを話し合い見つけて行くことを中心にお話を聴かせて頂いてきました。相談者の努力を認め、できていることをひとつひとつ確認しながら相談者をエンパワーして行く、そうすることで相談者が（大人も子どもも）自分の力で解決して行くまたは折り合いをつけて行くことができるようになって行くように思います。

子どもたちの中には、生きていくことの意味を考え、自分自身の存在意義を見出せずに不安と苛立ちを募らせて、「死にたい」「消えたい」とつぶやく相談も少なくありません。思春期特有の心の不安定さのなせる業なのでしょう。親にも誰にも自分を認めてもらえないと思い込んで身動きが取れなくなっていることも多いようです。振り返ってみれば、私にも確かにそういう時期があったことが思い出されます。

相談者の思いのありどころはどこなのか、話される思いに寄り添いながら相談者の頑張りを支持する。こんな自分でもいいんだ。僕（私）だけではないのかも知れない。言いたいだけ話したらちょっとだけスッキリした。自分のことをわかろうとしてくれる人がいた。etc.

そんな返事が返ってくるとうれしくなってきます。

あるご家庭のお話です。

学校を休むことが多くなった子どもを心配して相談して下さるお母さんと、教室の中に自分の居場所を見いだせないで登校を不安に感じている子ども…そして不登校の始まり。

親御さんにとって一番辛い日々の始まりかもしれないと思いながら、ひたすらお母さんに寄り添いました。自分の思うようにならないと「友だちにいじめられるから学校に行かない」と言って登校しない。家でゲームに熱中して生活のリズムを壊し、登校できない事実を認めたくない。不登校のまま中学校を卒業…卒業式にも出られないで終わる。学校側の手厚い配慮を受けながら、一人だけの卒業式で卒業証書を受け取る。進学先は決まったけれど「ちゃんと登校できるんだろうか…」と内心私は心配していました。

しかし後日、その子が新たなスタートを切って登校を始めたことを聞き、感嘆と賞賛の声を上げました！この子のどこにこんな力があったのか、何かを吹っ切ったように登校している子どもの様子をお母さんから聞いて、子どもって本当に無限の可能性を秘めているんだと思い知らされました。1・2年の足踏みはこの子には必要なことだったのですね。子ども自身の持っている力の大きさを見せてもらった相談でした。

子どもアシストセンターでの3年間でたくさんの相談者の皆さんからたくさんの力を頂きました。

本当にありがとうございました。

# 相談員のコラム

## 「これからも」

子どもの権利相談員 中田 育子

(在籍期間：H24.4～H27.3)

もう二十数年も前の事です。10歳のA君が「お母さんに包丁で叩かれた」と話してくれました。その後、その子の母親と話す機会があり「A君がお母さんに怒られた話をしてくれました」と切り出すと、母親はせきを切ったように話しました。

A君は内縁の夫の連れ子であること、内縁の夫がA君を置いて家を出て近所で若い女性と同居を始めたこと、A君が夫を慕って自分の言うことを聞かないこと、A君に感情をぶつけてしまうこと、包丁の峰でA君を叩いてしまう自分を抑えられないこと、等々…。

どんな理由があれ虐待は許されないことですが、母親の苦しい胸の内も伝わってきてなんともやるせない気持ちになりました。その時母親にどんな言葉をかけたのか子どもにどう語りかけたのかは、もうほとんど記憶にありません。当時 20 代半ばだった私には話の内容がとても重く感じられ、何の力にもなれなかったという思いだけがずっと残っていました。

アシストセンターに寄せられる相談には多種多様な内容があります。時には、A君の母親のように追い詰められた気持ちになっている大人の声が届けられます。「子どもをかわいく思えない」「いけないと思っても感情的に叱ってしまう」「子どもを施設に預けたい」。そんな苦しい気持ちを吐露したい、自分のつらさを分かってもらいたい。その思いの行き先の一つが、アシストセンターになっているのだと思います。話を聞くだけでは、そういう親の問題を解決することはできません。でも、話を聞いてもらうことで、また子どもに向き合おうと思える場合があることに、この3年間の相談を通じて気づきました。A君の母親はきっと誰かに話を聞いてほしかったのだと今は思えます。「大変だね」と声をかけてもらえる人がいれば、子どもとの向き合い方を少しは変えられたのかもしれない。

大人以上に多くの子どもたちの声がアシストセンターには寄せられます。友達関係の悩みが多いですが、中には「あんたなんか産まなければよかったと言われる」「親から暴力を受ける」「親と離れたい、家を出たい」等々、親との関係の切実な話もあります。「自分が悪いから」と思うことで親の言動を肯定し耐えていこうとする健気な子もいます。A君のようにつぶやく相手もなく、逃げたくとも行き場がなく、我慢し続けている子どもが、ここ札幌でも少なくはないことを相談を通じて感じています。

親子の問題でアシストセンターができることには限界があります。場合によっては本人の同意のもと関係機関と連絡を取ることもありますが、相談を受けながら、A君の母親から話を聞いたあの時に戻ってしまったような無力感にとられることもあります。でも、「誰かに自分の思いを受け止めてほしい」という気持ちのその「誰か」の一人に、アシストセンターがなれるといいのかなぁと感じています。相談者がどんな人であっても必要とする人がいる限り、これからも相談者の思いに寄り添うアシストセンターであってほしいと思っています。

# 相談員のコラム

## 「見つけよう！みんなのいいところ」

子どもの権利相談員 新井 知世

(在籍期間：H24.4～H27.3)

『自分に自信がない』

『みんなに嫌われている気がする』

『あの子とは気が合わない』

『先生なんか大嫌い』

『うちの子はダメなところばかりで…』

悩みを抱えてしまっている時はどうしてもマイナスな面ばかり多く目についてしまいます。そして『嫌だなあ』と思えば思うほど、その存在が疎ましく感じられるものです。この繰り返しで1つ嫌なところを見つけると、それを補足するかのように次の嫌なところが見つかり、その対象に対するマイナスイメージの負のスパイラル（連鎖）が生まれるのです。

確かに当人にとっては、その人(もの)に対する『嫌だな』と思う部分はあると思います。でも、本当にそれだけしかその人(もの)にはないのでしょうか？

威張ってばかりのあの子は実は皆を引っ張っていこうと頑張っているのかもしれない。成績がなかなか上がらなくて、いつもだらしなくて心配なあの子は本当は見えていないところで努力していて、それでもできなくて本人も悩んでいるのかもしれない。最近反抗期でお手伝いもしないで口答えばかりのあの子は本当はお母さんのことが大好きで、でも照れくさくて意地になっているだけなのかもしれない。…目に見えるところばかり気になってしまうのは仕方のないことです。でも、それだけが全てではないということを知ってほしいと思います。本当は頑張っていたり、態度とは違うことをしているかもしれないのに、それに気づかず表に出ている嫌な面だけで判断してしまうのはすごくもったいないと感じることが、この3年間の子どもアシストセンターの相談経験の中で多かったように思われます。

私たち相談員の役割は、悩みの本質を解決できるようにアドバイスするだけではなくて、こういった「見える部分」からだけでは分からないことやその人(もの)が持っている良い面・素敵な面にも目を向けてもらえるように、様々な視点を提供していくことなのではないかと思っています。少しでも良い面が見えてくると、敵対心ばかりだったところに歩み寄りの気持ちも生まれてくることがあり、悩みを解決していく上でも少し気持ちが柔軟になり、解決の新しい視点ができてくるので、一度狭い視野から飛び出して広い気持ちで見つめなおす機会を持ってもらえればと思っています。

日常の中でも『いいところ』をどんどん探して行って、自分や周りの人(もの)のことを好きになっていってもらえれば、相談員としてこれ以上うれしいことはないですね。